

THE
ハプスブルク



絵画とその時代

650年の長きにわたり、ヨーロッパに君臨し続けたハプスブルク家は、絵画を始めさまざまな工芸品等を収集しました。優れた審美眼と熱意をもって収集されたその品々は、洗練された豪華なコレクションを形成しました。

それでは、ハプスブルク家の人々の肖像画から観てまいりましょう。

ハプスブルク家の肖像画

宮廷肖像画は、16世紀初頭に成立し、君主の堂々たる相貌を再現するための唯一のものでした。従って、画家は、仮に多少似ていなくても、その容貌に品位と尊厳を強調し、統治者の偉大さと美徳に呼応した肖像画を描くことを求められました。つまり、君主のあるがままの姿だけでなく、それ以上に、あるべき姿を描くよう求められたのです。

作品1

作者名：ハンス・フォン・アーヘン

作品名：神聖ローマ皇帝ルドルフ2世 1600-03年頃



皇帝ルドルフ2世(1552-1612)の肖像画は数多くあるものの、この肖像画は本人の写生に基づいて制作されたため、ハプスブルク家の特徴ともされる突き出た顎、哀しげでいて感じやすそうな眼差しなど、私人としての素顔がよく描かれています。

ルドルフ2世は、ハプスブルク・コレクションのコレクターとして、また宮廷文化のパトロンとしても重要です。彼は政治よりも文化や芸術、公よりも私、現実よりも夢の世界に生きたタイプで、性格は内向的、夢想的、今でいうオタクでした。彼は生涯独身(愛妾はたくさんいました)で、自己の世界を追い続けました。

1583年にウィーンからプラハに遷都し、宮廷はその文化のメッカであり、カルチャーセンターと化していました。ここに集まったのは芸術家のみならず、当代一流の天文学者、占星術師、錬金術師、オカルティスト、数学者、植物学者、医師など多士済々でした。

作品2

作者名: オーストリアの画家

作品目: 金羊毛騎士団勲章をつけた神聖ローマ皇帝カール6世 1720年頃



マリア・テレジアの父、カール6世(1685-1740)はスペイン・ハプスブルク家の継承者に選定され、1703年にスペイン国王となりました。それによってスペイン継承戦争に巻き込まれましたが、兄である神聖ローマ皇帝ヨーゼフ1世の死後、その後継者となるためにスペインからオーストリアに戻りました。

カール6世の衣装は、15世紀にブルゴーニュ地方で流行した伝統的な修道服です。

(注) 金羊毛騎士団は、15世紀にフィリップ善良公が創設した騎士団で、王位継承権を持つ男子は、必ず金羊毛騎士団勲章を首にかけています。

作品3

作者名: アンドレアス・メラー

作品名: 11歳の女帝 マリア・テレジア 1727年



別紙レジユメをご参照下さい

作品4

作者名:ヨーゼフ・ヒツケル

作品名:軽騎兵連隊の軍服姿の神聖ローマ皇帝ヨーゼフ2世 1785年頃



マリア・テレジアの長男、ヨーゼフ2世(1741年－90年)は、1765年から80年まではマリア・テレジアと共同で領国を統治し、1780年以降はヨーゼフ2世の単独統治でした。単独統治の時代には、矢継ぎ早に改革が行われました。非カトリック宗派の同権、農奴身分の廃止、死刑の廃止、社会的活動をしない全ての修道院の廃止といったもので、富国強兵にも務めました。

この啓蒙専制君主政治は、福祉国家の理念を追求するものでしたが、教会や様々な民族の反発を呼び起こし、ヨーゼフ2世とその後継者は、改革の多くを再び撤回しなければなりませんでした。ヨーゼフ2世が着ている服は、彼の直接指揮

下にあるオーストリア軍の一騎兵部隊である軽騎兵連隊の軍服です。儀礼的な宮廷の服装を廃し、軍服の着用を好みました。ヨーゼフ2世と弟のレオポルト2世は、二人とも皇帝となりましたが、在位中に早世しました。それぞれが行動力のある君主として期待されていただけに、人々の受けた動揺は大きかったようです。

作品5

作者名:ヨハン・バプティスト・ランピ(子)

作品名:オーストリア皇帝フランツ1世 1804年頃



マリア・テレジアの孫。1792年、24歳でフランツ2世として神聖ローマ帝国最後の皇帝となりましたが、時流急迫の時代にあって凡庸な人物でした。在位して最初の20年は、フランス革命軍とナポレオン軍との戦争に占められ、この影響下で、彼は1804年に世襲の帝政オーストリアの建立を決意し、1806年に神聖ローマ帝国の解体を宣言しました。

私生活は全く小市民的なささやかなもので、皇帝といったイメージにはほど遠いものでした。家族で一緒に食事をし、家庭内でピアノの演奏をして楽しむといったごく普通の生活を好みました。長女マリー・ルイーゼは、ナポレオンから所望され、国家の犠牲となってナポレオンの元に降嫁し、1810年に

「フランス皇后」と呼ばれました。この結婚は、下積みの兵士から立身出生して皇帝まで上りつめたナポレオンにとって、歴史の重みを担ったハプスブルク家の皇女との子孫を残すことが目的でした。

作品6

作者名:フランツ・シュロツベルク

作品名:オーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ1世 1865-70年頃

作品7

作者名:ミハーイ・ムンカーチ

作品名:ハンガリーの軍服姿の皇帝フランツ・ヨーゼフ1世 1896年頃

作品6



作品7



1848年3月、ウィーンでは学生たちが検閲の禁止、憲法の制定を求めて蜂起、これを機として半年以上にわたり、ウィーンは混乱の巷と化しました。各地で学生を中心に改革を求める運動が続発し、ついに圧政の元締メッテルニヒはイギリスに亡命しました(三月革命)。これにより、フェルディナント1世は退位を余儀なくされ、

その年の12月フランツ・ヨーゼフ(フランツ1世の孫)は、18歳で5000万人のオーストリア帝国の皇帝になりました。

フランツ・ヨーゼフ1世は、幼少の頃から王権神授の意識を培っており、即位後は専制君主制に逆戻りしました。また、軍隊の力で各地の暴動をねじ伏せたため、「血で染まった若き皇帝」と名付けられました。この若き皇帝が統治した最初の20年間は、戦争に次ぐ戦争でした。ロンバルディアとヴェネツィア、トスカーナとモデナがイタリアに帰属し、1866年のケーニヒグレーツの戦いに勝利したプロイセンが、オーストリアを排したドイツの中心勢力として台頭しました。その翌年、ハンガリーとの和議をもってオーストリア帝国に代わり、オーストリア帝国とハンガリー王国とに二分して同じ君主を仰ぐオーストリア・ハンガリー二重帝国に再編されました。

作品8

作者名:フランツ・クサファー・ヴィンターハルター

作品名:オーストリア皇妃エリザベート 1865年

フランツ・ヨーゼフ1世の皇后で、絶世の美女でした(愛称は「シシィ」)。エリザベートは、長男フランツを皇帝にした母后ゾフィーとの確執から、生涯の大半(30年)を旅に費やしました。ゾフィーは実妹の長女ヘレーネをフランツの嫁にと見合いをさせますが、フランツは次女のエリザベートに心を奪われ、母の意志を無視してエリザベートと結



婚しました。二人の華燭の典は1854年4月に挙行されましたが、新婚早々クリミア戦争が勃発し、若き皇帝はその対応に追われ、新妻を顧みる余裕すらありませんでした。ゾフィーは、絶えず嫁の日常生活を監視し、ハプスブルク家のしきたりを教え込みました。また、エリザベートの最初の王女の死をきっかけに、彼女が産んだ王女、王子はゾフィーが取り上げて、自分で養育しました。こうして、皇太子ルドルフは母親の愛情を知らずに育てられ、エリザベートも息子に対して長い間、我が子という感情を抱くことができなかつたようです。後に、ウィーン近郊のマイヤーリングで、ルドルフは謎の自殺を遂げました。

エリザベートは美容に心がけ、20代から肉食を絶ち、野菜ジュースと果物しか摂らなかつたといわれています。身長172センチ、体重50キログラムの痩身で、ウエスト50センチを保つため、筋トレもしていました。

旅に明け暮れ、ウィーンには滅多に姿を現さなくなつたエリザベートですが、1898年、ジュネーブ湖畔でイタリア人の無政府主義者ルイジ・ルケーニによって暗殺されたのは、全くの偶然でした。犯人は別のフランスの要人を暗殺するつもりでしたが、目当ての人物が来なくなつたので、代わりにオーストリアの皇后を刺しました。

☆宮廷画家の報酬はどれくらい？

君主に仕えるお抱えの画家ですが、待遇は終身雇用ではなく、今でいう契約社員に近いものでした。年俸制または月給制で、多くの場合これは“基本給”にあたり、定期昇給に加え、多少の手当も付いたようです。また、作品を制作するごとに画料が加算される「出来高払い」もありました。宮殿内にアトリエと住まいを与えられて、家賃がタダというのも特権の一つですが、ベラスケスのように宮廷画家から出世して侍従長、式部官のような役職を兼ねる人もいました。

※ルドルフ2世の宮廷画家であつたスプランゲル(作品番号47・48)の場合、月給は1580年頃の15グルテン(今なら幾らくらい?)から20年後には3倍に跳ね上がり、晩年にはプラハ市内に家作を5軒持つほどの長者でした。

※神聖ローマ帝国マクシミリアン1世の宮廷画家デューラーの場合は、ちょっと気の毒です。「凱旋門」の大版面などを注文されましたが、皇帝の財政は厳しく、支払は滞る。しかも皇帝は崩御。困つたデューラーは新帝カール5世に嘆願すべく、戴冠式が行われるネーデルランドに出向き、支払を確約してもらいました。

※皇妃エリザベートの肖像画を描いたフランツ・クサファー・ヴィンターハルターは、当時、ヨーロッパで最も著名な宮廷画家でした。夫フランツ・ヨーゼフもこの絵を大変気に入っていましたが、一緒に描いてもらった対となる自分の肖像画を含めて、「大金がかかるだろう」とこぼしています。

それでは、いよいよハプスブルク家のコレクションです。このコレクションを鑑賞するにあたり、理解を深めるための美術史の流れとその時代を簡単に説明します。

【美術史の流れ】

盛期ルネサンス（1500～1530年）

レオナルド・ダ・ヴィンチ、ミケランジェロ、ラファエロのいわゆる三大巨匠が活躍した時代です。ルネサンスの規範だった古代と自然さえ凌駕し、これ以上ないといわれるほど完成されたものと言われています。これらの人が活躍したのはフィレンツェなので、フィレンツェ派と呼ばれています。

一方、ヴェネツィアを中心に活躍する色彩豊かで感覚的な画家たちが誕生し、ヴェネツィア派と呼ばれました。

後期ルネサンス（1530～1590年）

マニエリスムの時代です。マニエリスムとは、イタリア語の「マニエラ：手法・様式」に由来する言葉で、奇想や奇抜さを好み、芸術的技巧を凝らす様式です。ティントレット、エル・グレコ、スプランゲルの絵画にその特徴がみられます。

バロック（1590～1700年）

バロックとは「ゆがんだ真珠」という意味のポルトガル語「バロッコ」に由来します。一言で言うと古典から逸脱した美術様式で、その後、劇的・華麗な表現様式を意味することになりました。バロックの時代には2つの傾向があります。カトリック教会と結びついたイタリア・フランス・スペイン・フランドルでは、対抗宗教改革により民衆の心を再びつかむために、激しい動静・強烈な明暗表現・ダイナミックな構図などが特徴で、プロテスタントの影響が強いオランダでは、現実的でわかりやすく親しみやすいのが特徴です。

ロココへ

北方ルネサンス

ルネサンスはアルプス以北の地（主にオランダ、ベルギー、ドイツ）でも、イタリアルネサンスと同時に進行していました。油彩画の技法の発達によって細密描写が可能になり、極めて写実的な様式です。ファン・エイクやデューラーに代表されます。ちょっと、頭の隅に置いておいてください。

(注) フィレンツェ派は、構想を練ってからデッサンで構図を決め、計画的に色をおいていくのに対し、ヴェネツィア派は初めから絵の具で描き、修正しながら絵を完成させていきました。

【絵画に影響を及ぼした2つの重要なできごと】

1. ルネサンス

14世紀から16世紀にかけての西ヨーロッパでは、人間の理性や感性を重視する新しい文化創造の動きが展開しました。この時代にはペストの流行や戦乱で多くの死者を出し、社会は危機的様相を呈していました。そこで、人々はいかに生きるかを強く意識し、旧来の価値観にとらわれない発想を、様々な分野で表現するようになりました。

ルネサンスとは「再生」という意味ですが、イタリアに始まったこの運動は、ギリシャ・ローマの古典古代の学芸に立ち返って学ぼうとするものでした。

2. 宗教改革

教会の腐敗や教皇への批判から始まったこの改革は、皇帝や君主を巻き込む政治問題へと発展し、教皇と皇帝の権威を大きく揺るがせ、主権国家の形成を更に推し進めることになりました。1517年、ドイツの神学者マルティン＝ルターは、教皇が販売した贖宥状(免罪符)の効力に関する95か条の論題を提起し、「人は信仰のみによって救われる」と主張しました。ルターの考えは、活版印刷や版画によって宣伝され、大きな反響を呼び、聖書に書かれたことを根拠にすることで、人々は領主や教会、修道院を批判できるようになりました。

一方、カトリック教会では、1545年からトリエンテで公会議を開き、教皇の至上権と教義を再認識して態勢の立て直しを図り、これを対抗宗教改革と呼びます。また、異端に対する宗教裁判や禁書の統制が強化され、修道会を中心にカトリック信仰の刷新がはかられました。

(補足) ルネサンスと宗教改革の時代背景 (イタリア戦争と新しい国家秩序)

近世ヨーロッパでは、教皇や皇帝という、個々の国家を超越する権力が衰え、各国が独立性を強め、自国の領域内で最高の権力(主権)を主張するようになりました。これが主権国家といわれるものです。こうした主権国家の形成と、新しい国際秩序の契機となったのが、ルネサンス期のイタリアを舞台にしたイタリア戦争(1494-1559)でした。この戦争は、1494年、フランス軍のイタリア侵入を発端として始まり、ハプスブルク家とフランスのヴァロア家との間でヨーロッパの覇権をかけて展開され、やがて、疲れ果てた両家は、和約を結ぶこととなります。この間、同盟関係は複雑に変化しました。最初、フランスに対抗して、イタリア諸都市、スペイン、神聖ローマ帝国、イギリスが同盟して戦いましたが、ハプスブルク家は、巧みな婚姻政策によりネーデルランドとスペインを相続したうえ、1519年、同家出身のスペイン王カルロス1世が、フランス王フランソワ1世を抑えて、神聖ローマ皇帝に選ばれました(カール5世)。そこで、ハプスブルク家の強大化を恐れるイタリア諸都市・ローマ教皇・イギリスはフランス側につき、オスマン帝国もこれに加わりました。各国は、一国が強大となることを阻む勢力均衡の考えに立って、同盟外交を繰り広げ、その中から外交官の常駐制度や文書に基づく行政制度が整えられてきました。

イタリア絵画

作品9、10

作者名: ジョルジョーネ (ヴェネツィア派)

作品名(9): 矢を持った少年 1505年頃

作品名(10): フランチェスコ・マリア・デッラ・ローヴェレの肖像(兜を持った少年) 1502年頃

作品9



作品10



ジョルジョーネは、ルネサンス期のヴェネツィア派を代表する画家です。16世紀、海港都市として繁栄するヴェネツィアは、貿易により豊かになり異国人、異国文化が入り込んで華やかなコスモポリタンの都市でした。教会よりも世俗の力が強く(一般人が絵のパトロン)、色彩豊かで、表現も自由で、感覚的です。

作品9の少年の解釈は、ギリシャ神話のアポロン、愛の神エロスなど様々です。少年の眼差しは観るものの心を射抜き、矢はその隠喩と考えられています。作品10に描かれた手と顔が映り込んだ兜の描写は、当時の彫刻と絵画の優劣論争に対するジョルジョーネの画家としての技量の見せ所でした。

作品11

作者名: ベルナルディーノ・ルーニ

作品名: 聖母子と聖エリザベツ、幼い洗礼者聖ヨハネ

1515-20年頃

聖エリザベツは聖母マリアの従姉妹で、聖ヨハネの母です。イエスに洗礼を受けたヨハネは幼児で描かれることが多いです。この絵を観て、レオナルド・ダ・ヴィンチの名前が浮かんだとしたら、絵画通です。レオナルドの《岩窟の聖母》の前景に似て、構図は《聖アンナと聖母子》を左右反転したヴァリエーションです。



作品12

作者名:ロレンツォ・ロット (ヴェネツィア派)

作品名:聖母子と聖カタリナ、聖トマス 1527-33年



色彩が豊かで美しく、風景と調和して、どこかで自然な雰囲気があります。盛期ルネサンスでは、このように戸外の風景を背景とする聖母子が多く描かれました。この絵では、空気遠近法が用いられています。遠くにあるものは色が変わり薄くかすみ、近くのもののははっきりと描かれ、奥行きが出ています。

良い絵をたくさん描いたロレンツォ・ロットですが、生涯ほとんど栄光とは無縁で、経済的にも困窮を極めていたと推測されます。才能

がありながら、大きな仕事を依頼されるわけではなく、孤独のうちに息を引き取りました。彼が評価されるようになったのは、20世紀に入ってからのことです。

作品13

作者名:ラファエッロ・サンティ (フィレンツェ派)

作品名:若い男の肖像 1503年頃



ラファエロはイタリアルネサンスのスーパースターですが、この絵は若いときに描かれました。

本作品は、ラファエロの自画像と考えられた時期もあるようですが、おそらくは宮廷に出入りする若き人文主義者グループの一員のように、フィレンツェの自由な空気が感じられます。人文主義とは、神中心の宗教的世界観から人間の尊厳を確立し、人間性を蘇らせようという考え方です。

作品14、15、16

作者名: ティツィアーノ・ヴェチェッリオ (ヴェネツィア派)

作品名(14): イル・ブラーヴォ 1515-20年頃

作品名(15): イザベッラ・デステ 1534-36年頃

作品名(16): 聖母子と聖パウロ 1540年代初頭

作品14



作品15



作品16



色彩の魔術師と呼ばれたティツィアーノは、先輩ジョルジョーネの仕事を見て、更に絵画にリアル感を高め、ヴェネツィア絵画界のみならず、全イタリアナンバーワンの画家になりました。色彩の豊かさはもちろんのこと、画面からくる緊張感(作品14)…葉冠をいただいた若者は、左手の短刀を背に隠した鎧姿の男の剣に、抜け目なく手を置いています。堂々として眼力のある容貌の肖像(作品15)、作品16の聖パウロ(新約聖書の作者の1人で、キリスト教発展の基礎を作りました。イエスの死後に信仰の道に入り、この服はローマ兵士の時の服です)は横顔で描かれていますが、表情豊かで実に生き生きとしています。

ティツィアーノは正にヴェネツィア派の巨人でした。神聖ローマ皇帝カール5世、スペイン王フェリペ2世は、彼の主要なパトロンでした。

※工房とは？

中世の職人制度のもとでは、画家として公的な活動を続けるには、親方として組合に登録されることが必要でした。そのため、工房の親方に弟子入りして、通常3、4年の基礎訓練を受け、その後、助手として親方の仕事を手伝い、一定期間の奉公をして親方に認められて初めて、一人前の画家として活動ができました。

作品19

作者名:パリス・ボルドーネ (ヴェネツィア派)

作品名:寓意:マルス、ヴィーナス、ヴィクトリア、キューピッド 1560年頃



寓意とは、人物や物で「目に見えないあること」をほのめかすことですが、隠されたテーマを教養や知識で読み解く寓意画(難解で、エロチックなものが多い)は16世紀の宮廷や貴族階級の間で、もてはやされました。

戦いの神マルスが愛の女神ヴィーナスを抱いて、勝利の女神ヴィクトリアが二人の頭上にミルテの冠(古代の結婚の象徴)を掲げて

います。そして、キューピッドがヴィーナスの腿に注いでいるバラも結婚や愛の寓意です。結婚のお祝いに贈られた絵かもしれませんね。

作品20、21、22

作者名:ティントレット(本名ヤコポ・ロブスティ) (ヴェネツィア派)

作品名(20):35歳の貴族の肖像(ロレンツォ・ソランツォ) 1553年

作品名(21):オンファレの寝台からファウヌスを追い出すヘラクレス 1585年頃

作品名(22):キリストの笞打ち 1585-90年頃

作品20



作品21



作品22



ジョルジョーネ → ティツィアーノの流れは、ティントレットに受け継がれ、絵の表現はドラマチックです。ティントレットのモットーは「ミケランジェロの素描とティツィアーノの色彩」でした。作品22の宗教画には、それが良く表れています。キリストの磔刑が決まり、キリストは笞打たれます。それぞれの人物の躍動感が力強い筆致で表現され、ヴェネツィア派ならではの自由な表現力と色彩です。中央のキリストに当てられた神秘的な光に満ちた場面は、ティントレット芸術の真骨頂です。

作品20はティントレットの肖像画の頂点とも言える完成度の高い作品です。衣服と毛皮の縁飾りの表現は写実的で、全体からは静かで叙情的な雰囲気漂っています。

作品21は神秘主義とエロティシズムに夢中だったルドルフ2世のために制作されました。

作品24

作者名:ヴェロネーゼ(本名パオロ・カリアーリ) (ヴェネツィア派)

作品名:ホロフェルネスの首を持つユディット 1580年頃



この場面は、旧約聖書にあるシーンです。

美しく裕福なユダヤの未亡人ユディットは、敵のアッシリア軍による包囲から町を守るため、侍女とともに敵陣に乗り込み、指揮官ホロフェルネス將軍をその色香で惑わせ、泥酔したところを彼の剣でその首を切り落として、町へ持ち帰りました。指揮官を失ったアッシリア軍は敗退し、町を救ったユディットは人々から賞賛されました。

「切り落とされた首」というテーマはこの時期あたりから、かなり頻繁に描かれるようになり、ヨハネの首を所望したサロメと並んで量産されました。ユディットとサロメ

の見分け方は、剣を持っているのがユディットで、首がお皿にのっているのがサロメです。

ヴェロネーゼの絵は、殺害後の紅潮した顔の美しいユディットですが、ゴリゴリと首を切る音が聞こえてくるような生々しい場面の他作家の絵もあります。ホロフェルネスの顔は、ヴェロネーゼです。

ドイツのヨーハン・リスの作品と見比べてみてください。(作品44)

作品26

作者名:パオロ・フィアミンゴ(本名パウエルス・フランク)

作品名:黄金時代の愛 1585-89年頃



風景の中の裸婦というテーマは、ヴェネツィア派的なものです。官能的な表現がふんだんに盛り込まれている絵や、エロティックな裸のヴィーナスなど、寝室に飾る絵として流行しました。

作品29

作者名:ベルナルド・ストロツィ

作品名:受胎告知 1643-44年頃



ヨーロッパの宗教画のテーマは、「キリスト磔刑」、「聖母子」、次いで「受胎告知」です。大天使ガブリエルが処女マリアにキリスト懐胎のお告げをしにきます。受胎告知に必須の3点は、ガブリエル、マリア、聖霊の鳩です。

大天使ガブリエルの持つ百合の花はマリアの処女性を表します。マリアは祈祷書を読んでいるときにこのお告げを聞きます。※画面上、鳩がない・(^;)

自由な表現や色彩からヴェネツィア派の影響がうかがえます。

作品35

作者名:ベルナルド・ベロッド

作品名:フィレンツェのシニョーリア広場 1742年頃



この絵を見て、何か思い当たりませんか？ そうです。絵はがきです。

18世紀のイタリアは、経済的に凋落しつつあり、都市の没落の兆しも見え始めていました。かつての芸術の中心地は、観光地としてたくさんの旅行者が訪れました。そのお土産としてヴェドゥータ(都市景観図)が流行しました。

作家の叔父は、ヴェネツィアの町や運河を描いて人気を博したカナレットです。

ドイツ絵画

15世紀のヨーロッパは、戦乱、疫病(ペスト) 飢餓に見まわれ、社会は不安と行き詰まりの時期でした。また、16世紀のドイツでは、死の舞踏の主題(骸骨=死が人間に忍び寄って最後の審判を告げる)が流行するなど、世紀末的な不安が広まっていました。ルターの宗教改革のお膝元でもあり、デューラーやクラナッハらは独自の個人様式の絵画を生み出しました。

また、ニュルンベルクのような裕福な商業都市や、神聖ローマ皇帝マクシミリアン1世のような芸術に理解ある君主たちの宮廷から多くの注文があり、芸術家たちの才能を开花させました。

作品36、37、38

作者名:アルブレヒト・デューラー

作品名(36):青年の肖像 1500-15年頃

作品名(37):若いヴェネツィア女性の肖像 1505年

作品名(38):ヨハンネス・クレーベルガーの肖像 1526年

作品36



作品37



作品38



デューラーは、16世紀のドイツを代表的する画家です。最初に描いた作品は13歳の時の自画像で、西洋美術史上初の自画像といわれています。また、《アダムとイブ》はドイツで初めての裸体画でした。

デューラーは、最初、主に木版による書物の挿絵の仕事をしていましたが、結婚後ヴェネツィアに行き、イタリアルネサンス美術を学びました。帰郷後、工房を開き、《ヨハネ黙示録》の木版画連作で大成功を収めました。これはグーテンベルグの活版印刷の発明が大きく貢献しています。その後、再度ヴェネツィアに行き、イタリアのルネサンス芸術とドイツ芸術を調和させる独自の様式を生み出しました。それは「自然に反してはいけない」ということでした。対象の本質に迫るため、自然(見たもの)を絶対視し、理想化しない写実性を追求しました。

作品36、37 はヴェネツィア派の影響を受けた色彩ですが、それぞれの肖像の髪の毛、衣装などの細密描写は本当に写実的で、その質感が伝わってきます。

作品41

作者名:ルーカス・クラナッハ(父)

作品名:洗礼者ヨハネの首を持つサロメ 1535年



クラナッハはザクセン選定侯の宮廷画家になって以降、宗教画から世俗的テーマの絵画に至るまで、幅広い制作活動を行います。この絵は首がお盆にのっているのがサロメですが、衣装や背景が多少違いますが、ほとんど同じ構図とモデルで、ユディットも描いています。

サロメ(ヘロディアの娘)は領主ヘロデ王(ヘロデ・アンティパス)の祝宴で舞をまい、ヘロデ王を喜ばせました。その褒美として、願うものを与えろと言われ、ヨハネの首を所望しました。サロメの母ヘロディアはヘロデ王の弟の妻でした。ヘロデ王がヘロディアを娶ることを非難(近親相姦)したヨハネは、獄中に囚われていました。サロメは母ヘロディアに唆されて、ヨハネの首を所望したのです。

サロメの着ている衣装は、ザクセン王宮で流行していた洗練された深い襟ぐりのワンピースです。人物の人形のような質感はクラナッハの特徴です。

作品43

作者名:ヤーコブ・ザイゼネッガー

作品名:チロル大公フェルディナントの肖像 1548年

フェルディナント大公は、自分の思いを貫き、都市貴族の娘と結婚しました。当時、ハプスブルク家では貴賤結婚など到底認められることはありませんでした。政略結婚こそが領土拡大のチャンスなのですから・・・

この全身を描くという肖像画の形式は、ヤーコブ・ザイゼネッガーが考え出したものです。フェルディナント大公のウエスト下にのぞくのは「コードピース」といって、15, 16世紀に大流行した男性専用プロテクターです。



スペイン絵画

皇帝カール5世(1500-58)以来、スペインはハプスブルク家によって統治されました。スペインとスペイン王フェリペ2世(1527-98)は宗教改革に対して精力的に立ち向かったため、スペイン絵画はきわめて深い宗教性を帯びることになりました。結果として、ギリシャ神話など異教のテーマや裸体、画家の勝手な構想は認められませんでした。

フェリペ2世が即位した1556年からカルロス2世の死で終わるスペイン・ハプスブルク王朝150年を俗に文化上の黄金時代と呼び、グレコ、リベーラ、スルバラン、ベラスケス、ムリーリョ等多くの芸術家を輩出しました。

このスペイン絵画ブースは、本展覧会の目玉作品ばかりです。

作品66

作者名:エル・グレコ

作品名:受胎告知 1600年頃



1530年頃になると、奇想や奇抜さを好み、芸術的技巧を凝らすマニエリスムという様式が登場します。人体は奇妙に引き延ばされ、ねじれ、画面空間は非現実的なものになっていきます。グレコは自然の客観的な再現よりも主観的な美しさ、優美さを求めました。

天に向かって引き延ばされているような不安定な構図、また、稲妻が走っているような光の表現はこの世のものならぬ幻想的な感じがします。このようなグレコの絵は当時、あまり受け入れられませんでした。

作品67

作者名:ジュゼッペ・デ・リベーラ

作品系:聖痕を受けるアッシジの聖フランチェスコ 1645-50年

アッシジの聖フランチェスコはフランシスコ会を創設した中世イタリアで最も著名な聖人です。裕福な家庭に生まれましたが、改心後は清貧・貞潔に生き、弟子たちと共に各地を放浪し、説教しました。

このポーズは、オランズ(ラテン語:祈る人)のポーズです。リベーラはスペイン・バロック最初の大画家で、ゆったりした空間、明るい色彩と柔らかな光で充たされたこの絵は、彼の円熟期の作品です。

聖痕とは、キリストが磔刑に処せられたときにできた傷(手と足の甲、右脇腹の刺し傷)で、晩年、フランチェスコの体に現れました。



作品68

作者名:フランシスコ・スルバラン

作品名:聖家族 1659年



授乳する聖母の絵は、ルネサンス以降多く描かれてきましたが、トレント公会議(1545-63)で聖書に書かれていない場面を描くことが批判の対象となり、「授乳する聖母」の場面もそのひとつでした。そのため、この絵はスペインではきわめて珍しいものです。聖家族とは、聖母子と養父ヨセフです。

等身大で描かれた人物像、子が生まれた喜びが伝わる優しい柔らかな雰囲気は、親しみやすい絵画が多いスルバランならではのものです。

作品69

作者名:ディエゴ・ベラスケス

作品名:食卓につく貧しい貴族 1618-19年頃



ここから3点は、印象派の画家マネに「画家の中の画家」と絶賛されたベラスケスです。

初期にはカラヴァッジョ風の作品が多く、24歳でフェリペ2世の宮廷画家になった後は、他の画家との交流やイタリア訪問などで、独自の画風を發展させました。カラヴァッジョはイタリアンバロックの巨匠といわれる画家で、過激なリアリズムと強烈な明暗対比によって浮かび上がる人物の動作や表情で、ドラマチックな場面を演出しました。残忍な場面はより残忍に、

みずみずしいものは、今そこにあるように・・・といった具合です。

この作品は、まさにカラヴァッジョの影響が見て取れます。没落貴族の日常生活が浮かび上がり、装飾のある塩入れが過去のよき時代を物語っています。

作品70

作者名:ディエゴ・ベラスケス

作品名:白衣の王女マルガリータ・テレサ 1656年頃



マルガリータ王女は、ベラスケスによって世界で一番有名な王女になりました。絵はマルガリータ王女の成長記録であると共に未来の夫へ(レオポルト1世)のお見合い写真でもあり、この絵を含めて3点がウィーンに送られました。

近くで観ると、ちょっと荒いような筆使いも多少の距離を持って眺めると、実にリアルに、細部まで浮かび上がってきます。

スペイン王家の女性の肖像画は、その多くが当時ヨーロッパで流行のトップモードで、マルガリータ王女も流行の衣装を着ています。

作品71

作者名:ディエゴ・ベラスケス

作品名:皇太子フェリペ・プロスペロ 1659年



この奥行きのある画面は、宮廷肖像画の伝統に従っていて、室内には椅子、クッションが配され、従者として犬が添えられています。この何とも愛くるしい王子は、待望の皇太子でした。当時は、3、4歳までは男の子がスカートをはいて女の子の衣装を着ていました。女子の方が身体が丈夫だから、それにあやかるためでしょうか？

身体につけている護符、薬の入った珠は魔よけで、この王子が病弱であることを物語り、付けた鈴は王子の所在を知らせるためのようです。気の毒にも、この王子は肖像画が描かれた2年後、神の元に召されました。

作品72, 73, 74

作者名:バルトロメ・エステバン・ムリーリョ

作品名(72):幼い洗礼者聖ヨハネ 1650年—55年頃

作品名(73):悪魔を奈落に突き落とす大天使ミカエル 1665—68年頃

作品名(74):聖家族と幼い洗礼者聖ヨハネ 1668—70年頃

作品72



作品73



作品74



民衆の感情に訴えることを主眼に置いたムリーリョは、優しく甘美な宗教画を描きました。作品72洗礼者ヨハネは、新約聖書に登場するユダヤの預言者で、ヨルダン川でイエスに洗礼を受けました。マタイ福音書によると、駱駝の皮を着て、腰に革帯を締めています。十字架に結んだリボンには「見よ、神の子羊」(子羊はキリストを表しています)と書かれています。登場人物の顔がかわいらしく、庶民の子がモデルになっています。

作品73の絵ですが、暗闇から出て輝きを放つ剣は、暗黒に対する光の勝利、つまり異端に対する信仰の勝利を表現しています。

作品75

作者名:フランシスコ・デ・ゴヤ

作品名:カバリエーロ侯ホセ・アントニオの肖像 1807年



ゴヤはスペイン国王の宮廷画家として、君主やその家族を描いただけでなく、宮廷国家に属する公的人物や政治家も描きました。モデルはスペインの法相です。

ゴヤは宮廷画家として出世街道を歩んでいましたが、大病を患い聴覚を失うと狂気や魔女など人間のグロテスクな面を描くようになります。特に晩年の“黒い絵”シリーズは、人間の怒り、絶望、社会への批判を表現しています。

フランドル・オランダ絵画

フランドル(アルプス山脈以北・オランダ、ベルギー地方)は、15世紀から羊毛産業や国際貿易の振興などによって経済的な繁栄を誇り、フィレンツェと同じく商業の中心地でした。そのため、商人や手工業者の勢力が強く、貴族や富裕な市民階級による自由都市が形成されていました。1419年、フィリップ善良公が宮廷を北のディジョンから南のブリュッセルに移し、ネーデルランド諸都市などを支配すると、南部のフランドル地方は文化の中心地となります。

また、ルネサンスというと、まずイタリアルネサンスを想起しますが、このフランドル地方にも同様な機運が起きました。それを美術史においては北方ルネサンスと呼んでいます。特に、この地方に発生した油彩画の技法の発達によって、細密な描写が可能になり、「現実世界の再現」という人々の志向もあいまって、絵画は質感を持った極めて写実的なものになります。そして、聖書の世界を彼らの日常世界で展開していきます。それ以前は、神は「人」でないので、人物は単純で図式化された(つまり、動きがない)表現で、構図は聖書の中の場面そのままでした。

ルーベンスは、対抗宗教改革の画家としてネーデルランドにおいて偉大な業績を残しました。また、アンソニー・ヴァン・ダイクは繊細な描写とモデルの心の中を見透かすような鋭い洞察力を持つ傑出した肖像画家でした。

作品47

作者名:バルトロメウス・スプランゲル

作品名:ヘルマフロディテとニンフのサルキマス 1580-82年頃



スプランゲルはマニエリスムを代表する画家で、この作品はルドルフ2世の注文による神話画シリーズの1枚です。恋に焦がれたサルマキス(画面の手前)は自分の身体とヘルマフロディテ(画面の奥)の身体が永遠にひとつになるように神々に願い、この青年を自分の泉におびき寄せ、服を脱いでいる場面です。言い伝えによると、2人の一体化が起こり、この泉では、以後そこで水浴する人はみな両性具有となり、ヘルマフロディテと呼ばれるようになったということです。ヘルマフロディテとは、美しい女体を持った美少年(ヘルメスにして、アフロディーテ)という意味を持ち、両性具有を意味する言葉です。作品48の《ケレスとバックスがいないとヴィーナスは凍える》という絵のテーマは、古代

ローマの喜劇「宦官」に由来し、「パンと葡萄酒がなければ愛も冷める」ということだそうです。

作品50

作者名:ヤン・ブリューゲル(父)

作品名:森の風景 1605-10年頃



以前は絵画の背景にすぎなかった風景が独立したジャンルとなるのは16世紀のフランドル、そして17世紀のオランダにおいてです。それまでは、絵のパトロン(お客)は教会が主でしたが、裕福な市民へと移ったことも大きな要因です。

作者ヤン・ブリューゲルは「花のブリューゲル」と呼ばれ、花瓶にあふれんばかりの美しい花々の絵で有名です。この絵の中には、彼の細部にこだわる気持ちが随所にあります。

「森」は今でこそ、オゾンいっぱいの癒し空間ですが、この時代にはさまざまな恐れや空想によって、何か隠された秘密があるかのように考えられていました。この絵にもそのような雰囲気があります。森の奥には犬を連れた人、サギ、フクロウ、小猿、ウサギなど動物がたくさん描かれています。探してみてください。

作品53

作者名:ペーテル・パウル・ルーベンス

作品名:悔悛のマグダラのマリアと姉マルタ 1620年頃



ルーベンスは神話、聖書、歴史、肖像、風景とあらゆるジャンルにたけたバロックの巨匠といわれています。アルブレヒト大公の宮廷画家となった後、アントウェルペンの工房(描くのは職人、構想を練るのは画家)では何人もの弟子を擁し、ヨーロッパ各地からの注文に応じる分業量産体制を確立していました。また、豊かな教養と巧みな語学力を生かして、外交官としてもヨーロッパの和平に尽力しました。

フランドル地方は宗教改革の影響が強く、プロテスタント化していましたが、やがて再びカトリックが巻き返し、ルーベンスは教会のためにたくさんの絵を描きました。

この絵はマグダラのマリアの回心(神に心を向ける)の瞬間が、背景の赤いマントの中に、見事に浮かび上がっています。

マグダラのマリアは聖人に列せられている女性で、イエスの死と復活を見届ける証人です。裕福な出ですが、美貌と富ゆえに快楽に溺れ(娼婦の説あり)、後にイエスに出会い悔悛したとされています。マグダラのマリアは緑色の衣装に朱色のマント姿で描かれます。アトリビュート(持ち物)は香油壺や髑髏ですが、この場面は回心の瞬間なので、今までの生活にけりをつけるという意味で宝石箱を足蹴にしているのでしょう。

作品56

作者名:アンソニー・ヴァン・ダイク(?)

作品名:男の肖像 1628年頃



作者の(?)は、ヴァン・ダイクがルーベンスの工房で、助手、ひいては共同制作者として何年にも渡り活動したため、2人のうちのどちらの手によるものか判別するのが難しい作品があるからです。この絵もそうで、本質的なものだけに絞り込んでクローズアップした構図や、モデルの姿勢や質感はルーベンスのようですが、優雅な雰囲気や練り上げられた性格描写はヴァン・ダイク的です。

ヴァン・ダイクは「ひとつの国に巨匠は二人いない。」と言って、フランドルを去り、イギリスに渡り活躍しました。彼の優美で華麗な表現は人気を博し、人々はこぞってヴァン・ダイクに肖像画を注文しました。

作品61

作者名:レンブラント・ハルメンスゾーン・ファン・レイン

作品名:読書する画家の息子テイトス・ファン・レイン 1665年頃



レンブラントは17世紀のオランダを代表する画家です。最初は明暗法を駆使し、激しい動きや表情によるドラマチックな作品を描いていましたが、次第に、抑制の効いた色彩と独特の厚塗りによるマチエール(絵肌)で、人間の内面と向き合うような深い静けさが漂う作品を描いていきます。

この作品は、左上方からの柔らかな日差しが少年の顔を照らし、何とも穏やかで優しい雰囲気に満ちています。後世、多くの画家たちに大変認められるレンブラントですが、実生活では最愛の妻サスキアの死、遺産相続問題の泥沼化、自己破産、息子の死と失意のうちに世を去ります。

この作品を描いた頃のレンブラントは、何もかも失ったどん底の時期です。

作品60

作者名: サロモン・ファン・ライスダール

作品名: 渡し船の川のある風景 1644年



オランダの風景画には必ず水(運河、河川、小川、湖、海など)が描かれています。テーマも重いこったりした作品を観た後で、このようなどこかで見たことがあるような懐かしい匂いのする絵に出会うと、一気に好きになってしまいます。風のない午後、水面には家や木々が写り、かすかに波立つ揺らめきはこの画面の静けさを際立たせています。

ライスダールは17世紀のオランダを代表する風景画家で、ライスダールの模倣をする多くの画家が現れました。

作品64

作者名: ピーテル・デ・ホーホ

作品名: 女と子どもと使用人 1663-65年頃



オランダでは、絵画の注文主が市民階級であったことから、現実的で、わかりやすく親しみやすい作品が求められました。そのため、風俗画(人々の日常生活を描いたもの)が発達しました。

家庭生活の何気ない一場面が、実に写実的に描かれています。暖炉の傍らで子にお乳を飲ませる母親、少女と外に出ようとする若い女性、扉の外の世界などが正確に描写されています。授乳する女性と買い物に出ようとする女性の衣装の対比から、外に出ようとしている若い女性は、この家の使用人です。

作品55

作者名:ウィレム・クラスゾーン・ヘーダ

作品名:ハム、オウム貝のカップ、シャンパングラス、銀のデカンタのある静物 1654年



せてくれます。

静物(Still Life)という言葉自体、17世紀のオランダで生まれた言葉です。作者はこの作品を制作した当時、静物画家として絶頂期にありました。

テーブルの上に置かれた品々は、どれをとっても実物以上にリアルな感じがします。テーブルの上に敷かれた白い布、その下の青いビロードが卓上の品々を更に生き生きと際立たせています。細部に至るまで、全く手を抜かずに仕上げている、絵画の持つ別の凄さを感じさ

参考文献

THE ハプスブルク公式カタログ

新西洋美術史 監修千足伸行 西村書店

鑑賞のための西洋美術史入門 視覚デザイン研究所

西洋絵画史入門 諸川春樹 美術出版社

西洋美術史ハンドブック 高階秀爾・三浦篤編 新書館

ケンブリッジ西洋美術の流れ4 マドレーヌ／ローランド・メインストーン 岩波書店

ケンブリッジ西洋美術の流れ5 スティーヴン・ジョーンズ 岩波書店

ハプスブルク家の女たち 江村 洋 講談社現代新書

怖い絵 中野京子 朝日出版社

週間美術館 デューラー／ファン・エイク 小学館